

戦争の記憶継承の県の取組みについて

山形県健康福祉部地域福祉推進課
令和8年2月

本県の戦後80年の取組み

広く県民向けの展示を実施



県民が書き残した戦争展（令和7.8.1~28）遊学館展示スペース

本県の戦後80年の取組み

若い世代への記憶の継承

小学生

ワークショップ
遊学館学習室
(令和7.8.1)



中学生

「平和の作文」朗読
県戦没者追悼式
(令和7.10.10)



高校生

慰霊祭参列
沖縄「山形の塔」慰霊祭
(令和7.11.12)



2

本県の戦後80年の取組み

取組みに対して寄せられた感想

- ・自分の親も戦争に行ったが、もっと話を聞いておけばよかった。
(「県民の書き残した戦争展」)
- ・とにかく戦争をしては絶対にダメ！(小学生ワークショップ)
- ・山形でも空襲があったと初めて知った。山形でも死者がでたことは決して忘れてはいけない。(小学生ワークショップ)
- ・戦争を経験したことのない私たちでも、なんの考えも持っていないということはやめないといけない。(小学生ワークショップ)

3

本県の戦後 80 年の取組み

取組みに対して寄せられた感想

- ・「自分たちの年と変わらない若者が戦場に立たざるを得なかった事実を思うと胸が締め付けられる。戦争を体験していない私たちだからこそ、戦争の悲惨さを学び、次世代に伝えていく責任がある」
(沖縄「山形の塔」慰霊祭 高校生 追悼の言葉より)
- ・「戦争を経験した人は減っていくが、戦争を知る方法はいくらかもある。多くを学び、次世代に伝えていくことが今を生きる我々の責任だ」
(沖縄「山形の塔」慰霊祭 高校生 追悼の言葉より)

4

本委員会設置の背景と経緯

失われる資料・証言

- ・ 本県の戦傷病者が令和 6 年度にゼロとなった。
- ・ 資料が散逸しているとの指摘
- ・ 体験を直接聞ける機会は急速に減少

県民の継承意識の存在

- ・ 若者世代の参加・感想
- ・ 記憶を次世代へつなごうとする意識

現状を整理し、今後の資料の保存と記憶継承のあり方を検討する必要性

5

関係者・関係機関からの状況聞き取り

- ・家の建て替えや蔵の解体などで処分されるケースがある。
- ・代替わりした際に遺品が処分され、かなりの部分が失われている懸念がある。
- ・資料として価値があっても所持している人には保管場所や金銭面で負担がかかる場合があり、処分される方向へ進むこともある。
- ・証言記録を残せるのは戦時中に小学生だった人が90代である今が最後の機会。語り部の記録を残す等取組みを急ぐ必要がある。

⇒証言記録や資料が失われる危機。保全に努めることが喫緊の課題

6

関係者・関係機関への状況聞き取り

- ・戦争の記憶継承は教育中で行うのが適切。県内各地域に戦争の歴史があり、それを各地域で伝えていくことも重要。小規模展示でも各地域にあれば学びにつながる。
- ・山形県内にも戦争中のエピソードはたくさんある。物が訴えることもあるがその背景を伝えることが重要と感じる。
- ・「語り継ぐ人がいない」という言葉は若者の興味関心をひきやすい。資料館を作っただけではいずれ疲弊（維持管理費用、利用者の減少等）する。継続できる仕組みづくりが必要。

⇒どのような資料を集め、どのように活用するのか
『持続可能な仕組みづくり』が不可欠

7

本委員会の設置目的と所掌事項

設置目的

山形県における戦争の記憶や平和の尊さを次世代へ継承していくため
様々な視点から意見交換すること

所掌事項

○本県における資料展示のあり方

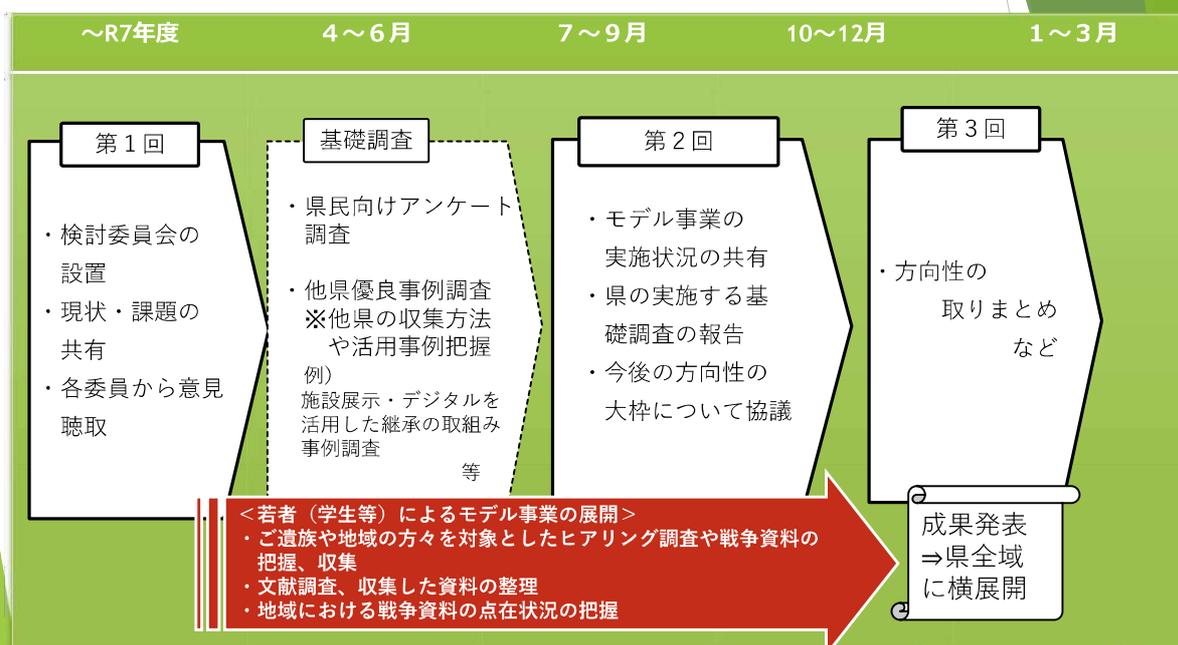
- 例 ・ 資料収集の基準、方法
- ・ 展示手法

○戦争の記憶や平和の尊さを継承する持続可能な仕組み

- 例 ・ 多様な主体（若者、教育、地域等）による取組みの展開

8

今後の進め方



9